

□報告□

学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方 —卒業時学生のインタビューから—

野本 義則^{1,2} 杉原 素子³ 谷口 敬道³ 平野 大輔³

抄 録

目的：作業療法士養成校を卒業した者達の臨床実習体験の語りを通して、学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方を探索する。

方法：専門学校作業療法学科修了生 17 名を対象に、「臨床実習について、良かったことや悪かったこと、その改善策」を主題とするインタビューガイドを作成してフォーカス・グループ・インタビュー (Focus Group Interview) を行った。質的分析方法として、安梅の「グループインタビューの分析法」と Vaughn らの「分析の方法」を参考に、また分析に際して、質的研究支援ソフトである NVivo12 Pro を使用した。

結果：《実習学生への丁寧な対応》、《実習指導者の専門職としての資質》、《実習学生の悩みを汲み取れない実習指導者》、《実習施設の人間関係》の 4 つが重要カテゴリーとして抽出された。

考察：学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方として、1) 実習学生への丁寧な対応、2) 専門職としての資質向上、3) 実習学生の悩みの理解、4) 職場内の良好な人的環境、の 4 つと、その実現のために「実習指導者の臨床実習に対する高いモチベーション」が必要であると提言する。

キーワード：臨床実習、作業療法学生、実習指導者、フォーカス・グループ・インタビュー

I. はじめに

1. 背景

2016 年の国会において、理学療法士・作業療法士の臨床実習に関する現状と課題が取り上げられた。その内容には「実習と称して見よう見まねの非科学的指導」、「指導者からのパワハラ・セクハラ、いじめ、暴力」¹⁾といったものが含まれていたことから、リハビリテーション専門職養成課程における臨床実習のあり方に関する議論の加速につながった。

2017 年 6 月より厚生労働省による理学療法士・作業療法士学校養成施設カリキュラム改善検討会が開催され、その検討内容の一つに、「臨床実習の在り方について」が含まれていた。そして 2018 年 10 月には「理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則」が、教育

内容の見直しや専任教員の要件、そして臨床実習の在り方を中心に改正された。同時に新たな「理学療法士作業療法士学校養成施設ガイドライン」が定められ、臨床実習の時間数や臨床実習指導者の要件などの改正が行われた。また日本作業療法士協会(以下、OT 協会)は、『作業療法臨床実習指針 (2018)』および『作業療法臨床実習の手引き (2018)』を策定、3 月に発刊し、そこには実習の意義と目標、臨床実習指導方法論として実習指導者の役割や近年の学生の特徴とそこにかかわり方の留意点、作業療法参加型実習における見学-模倣-実施の段階的な具体的指導方法、養成校との連携や実習指導上の倫理やハラスメント防止など多岐にわたる内容が実践に即した形で解説されている²⁾。

このような中、従来の臨床実習の抱える問題点の改

受付日：2020 年 1 月 20 日 受理日：2020 年 5 月 18 日

¹⁾ 国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健医療学専攻 作業療法学分野博士課程

Division of Occupational Therapy, Doctoral Program in Health Sciences, Graduate School of Health and Welfare Sciences, International University of Health and Welfare

²⁾ 東京医療学院大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

Major of Occupational Therapy, Department of Rehabilitation, Faculty of Health and Medical Care, University of Tokyo Health Sciences

y-nomoto@u-ths.ac.jp

³⁾ 国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科

Graduate School of Health and Welfare Sciences, International University of Health and Welfare

善や新たな臨床実習形態としてクリニカルクラークシップの紹介³⁾, 専門学校でのクリニカルクラークシップの実践報告⁴⁾, これまでの実習指導法の限界やクリニカルクラークシップ型臨床実習の実践とそのメリットの報告⁵⁾, など養成校教員からの報告がある。さらには, 臨床実習を実際に臨床現場で指導する作業療法士からも, 実践に基づく従来の実習とクリニカルクラークシップの違い⁶⁾, 臨床実習の質の向上のために新たな研修の必要性⁷⁾, 実習指導者の視点からクリニカルクラークシップの実践の報告⁸⁾ など, 数多く報告されている。しかし, 実習指導を受ける学生が現場での実習指導をどのように捉えているかは, 実習に対する学生の満足度に関するアンケート調査など^{9,10)}の研究はみられるものの, 学生の実習体験の語りから捉えた臨床実習の課題やその改善策についての報告はみられない。

2. 目的

臨床実習の在り方を考えて行くためには, 養成校の教員や実習指導者だけではなく, その当事者である学生の語りから得られた, より具体的な情報や意見を収集し, 現状と課題を分析することが重要であると考えた。本研究では, 作業療法士養成校を卒業した者達を対象者とし, 彼らの臨床実習体験の語りを通して, 学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方を質的研究方法により明らかにすることを目指した。

II. 方法

1. 研究デザイン

研究デザインはフォーカス・グループ・インタビュー (Focus Group Interview, 以下 FGI) を用いた質的研究である。FGI は, ある特徴に焦点を当てて抽出した少人数のグループを対象に特定の話題についてインタビューする方法である。FGI はグループダイナミクスを活用することで, 「力動的な当事者間のやり取りからより自然体に近い方法で醸し出された情報を把握できる」という強みがあり, 「関係者がどのようなニーズ・意見を持っているか明らかにする」, 「新しい考え

方や概念, やり方や解決の方法を創造する」, といった研究テーマに有効な手段とされている¹¹⁾。一方, 今回のようにインフォーマントが同級生といった顔なじみである場合, これまでの人間関係が発言に影響されるといったデメリットもある。また, 学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方の提言のためには, 様々な養成校の学生から多くの情報を得て整理する必要がある。しかし学生の語りから臨床実習の方策についての検討は十分に行われていない現状があるので, 同一の集団で行った本研究は, その実践のひとつと位置づけ, 今後のさらなる研究の礎となることを目指す。

2. 対象

インタビューアに対する遠慮や本音が言いづらいといった可能性もあるが, インフォーマントの語りやすさへの配慮と, 彼らの語りをイメージしやすいということから, 対象は筆者が担任した A 専門学校作業療法学科卒業生で, 本研究趣旨に同意した 17 名 (男 8 名, 女 9 名) とした。対象者の平均年齢は 22.7 ± 1.4 歳であった。A 専門学校の実習は, 1 年次に 1 週間の見学実習, 3 年次と 4 年次に 3 週間の評価実習を各 1 回, 4 年次に 10 週間の総合臨床実習を 2 回で構成されている。

3. FGI の実施方法

FGI は 2019 年 3 月に A 専門学校のカンファレンス室にて実施した。対象者 17 名を無作為に 9 名 (男 3 名, 女 6 名) と 8 名 (男 5 名, 女 3 名) の 2 グループに分け, 「臨床実習について, 良かったことや悪かったこと, その改善策」を主題とするインタビューガイド (図 1) を作成し, それぞれ概ね 60 分の半構造化面接を行った。FGI の進行役は筆者が務めた。進行の際には Vaughn らの「フォーカス・グループ・インタビュー内での司会者の役割」¹²⁾ を参考に, 筆者自身の価値観や先入観, 対象者同士の力動による発言の広がりや留意しながら実施した。またインタビューアもインフォーマントも過去に面識があるため, 心理的バイアスが生じるやすいことを考慮し, インフォーマ

**学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方
インタビューガイド**

導入

①挨拶・自己紹介
 -本日はお忙しい中、お時間をいただきましてありがとうございます。私は国際医療福祉大学保健医療学専攻作業療法学分野博士課程1年に在籍する、野本義則と申します。本日は研究課題「作業療法士養成課程における臨床実習」に関するグループ面接調査を行わせていただきます。

②面接の目的、内容の説明
 -まず、本研究の趣旨について、何かご不明な点はございませんでしたでしょうか？(不明点があれば説明する)では再度、簡単に本研究について説明させていただきます。
 -この面接は60分程度を予定しています。皆さんにお話いただきたい内容は、「作業療法士養成校での臨床実習の体験を振り返り、その良かったこと、悪かったこと、その改善策についてです。
 -面接の中で、過去に経験した事例を想起することによって心的負担や苦痛が生じる可能性があります、言いたくないことは言わなくてよく、面接途中であっても面接を中止できます。それにより何ら不利益を被ることはありません。また、この面接後にも同意を撤回することもできます。

③研究協力の同意確認
 -本研究に関する説明は以上です。なにか質問はありますか。研究協力への同意の意思に変わりはありませんか。
 -面接内容は正確に分析するために、ICレコーダーに録音させていただきたいのですがよろしいでしょうか。(録音を希望されない場合：面接中に主要となるメッセージを記述させていただきます。)録音したデータについては研究をまとめる際にインタビューの一部を引用することがありますが、匿名性を守ります。

インタビュー

①イントロダクション
 -まず、皆さんの臨床実習の中で、もっとも印象に残っている出来事などについてお話しください。
 私が教員であることは気にせず、出来事やその時の思いを、出来るだけありのままお話しください。

②主要部分
 -作業療法士養成校の臨床実習を振り返り、良かったことや悪かったこと、その改善策についてお話しください。
 <予備質問>
 実習内容、実習指導者、実習環境、指導者以外のスタッフ、
 <実施中の配慮>
 ・実習中の出来事などをありのまま話せるように配慮する。
 ・実習中の出来事に対する感情などについて率直に話せるように配慮する。
 ・学生同士で揶揄や冷やかしが起きないように配慮する。
 ・学生が教員であるインタビューアーに気遣いをしないように配慮する。

終了

-面接の終了と協力に対する感謝
 -以上で面接を終了します。本日はお忙しい中、研究に協力していただきありがとうございました。

図1 インタビューガイド(抜粋)

ントにはできるだけ率直に考えを伝えてもらうよう依頼し、インタビューアーもインフォーマントが率直に話せるように配慮した。インタビューの内容は対象者の同意のもとICレコーダーに録音した。

4. 分析方法

分析方法は、安梅の「グループインタビューの分析法」¹³⁾とVaughnらの「分析の方法」¹⁴⁾を参考に質的データ分析を行った。また分析に際して、質的研究支

援ソフトであるNVivo12 Pro 日本語版 for Windowsを使用した。NVivo12を用いることで、付箋やカードなどを用いた従来の煩雑な作業を不要とし、大量のテキストデータの管理および整理を容易に行うことができた。さらに、コーディングの元データや作業ログの参照が可能であり、可視化されたデータ分析支援もあり、より客観性と妥当性がある分析を可能とした。

まずICレコーダーの音声データをテキスト化し、正確な逐語録を作成した。次に、「重要な内容」、「意

味深い内容」に基づいてコーディングし、その意味・内容に基づいて重要アイテムとした。重要アイテムをその類似性に基づいて統合し、サブ重要カテゴリーとして意味内容をあらかず抽象化された名をつけた。サブ重要カテゴリーのまとまりを表せるように概念化を行い重要カテゴリーの名称をつけた。その分析結果を、インタビューの主題である「臨床実習について良かったことや悪かったこと、その改善策」に即して整理した。

分析および抽象化、結果の真実性を確保するため、作業療法教育および質的研究に経験のある研究者とともに検討および議論を行い、作業療法教育および質的研究の熟練者から指導を受け、分析内容の妥当性を高めるよう努めた。

5. 倫理的配慮

本研究は国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て行った(承認番号 18-Io-151)。FGI参加学生には文書を用いて口頭で説明し、同意を得て実施した。

III. 結果

分析の結果は、重要カテゴリー名を《 》、サブカテゴリー名を< >と記載する。またインフォーマン

トの語りの抜粋部分については、/ /で括った。逐語録から「重要な内容」、「意味深い内容」とコーディングされた数は48個であった。分析結果を示す表の中で、学生の発言内容は、発言者の特定などを避けるため、発言内容の意味を損ねないように配慮して要約を記載した。

分析では、インタビューの主題である「臨床実習について良かったことや悪かったこと、その改善策」に即して、「実習における肯定的体験」と「実習における否定的体験」、それに「改善策」の3つに整理することを目指したが、「改善策」について十分な発言を得られなかったため、「実習における肯定的体験」と「実習における否定的体験」に大別して整理した。

1. 実習における肯定的体験

分析の結果、「実習における肯定的体験」について抽出されたサブカテゴリーは2項目、重要カテゴリーは1項目であった。抽出された重要カテゴリーは、《実習学生への丁寧な対応》、サブカテゴリーは、<実習学生に寄り添う指導>、<具体的な指導>に分類された(表1)。

1) <実習学生に寄り添う指導>

実習学生の不安や緊張を解きほぐすための実習指導

表1 実習における肯定的体験《実習学生への丁寧な対応》

重要カテゴリー	サブカテゴリー	重要アイテム	発言内容(要約)
実習学生への丁寧な対応	実習学生に寄り添う指導	不安がない	・一緒にやろうという雰囲気。 ・不安を与えない関わり。 ・学生に寄り添う態度。
		良さを認める、引き出す	・学生の良さを伝える関わり。 ・学生に成果を感じさせる。
		良い関係を作ろうとする	・良い関係を作ろうとしてくれる。 ・考えをしっかりと聞いてくれる。 ・学生と考えを共有する。
	具体的な指導	やるべきことが明確	・実習の予定を示す。 ・指示が明確だと動きやすい。 ・やる事が明確だった先生はありがたい。
		わかりやすい説明	・しっかりと教えてくれた後に、それをやらせてくれる。 ・具体的に言ってくれるとやりやすい。

者の働きかけや、実習学生の良さを伝え、自信を持たせる体験を学生は肯定的に捉えている。また実習指導者が実習学生との良好な関係を築こうとすることに対して肯定的な意見が挙げられていた。

2) <具体的な指導>

実習学生の予定や実習の具体的手順などを実習指導者が提示することで、実習学生は能動的に行動できた。また手本を示し、それを真似て行うことや具体的な改善点を伝える指導に対し、学生は肯定的に捉えていた。

2. 実習における否定的体験

「実習における否定的体験」として、抽出されたサ

ブカテゴリは6項目、重要カテゴリは3項目であった。抽出された特徴から重要カテゴリは、《実習指導者の専門職としての資質》、《実習学生の悩みを汲み取れない実習指導者》、《実習施設の人間関係》に分類された。

1) 《実習指導者の専門職としての資質》

《実習指導者の専門職としての資質》は、<凄みのある指導>、<実習学生が在籍する養成校への先入観>、<独自の実習指導>の3項目のサブカテゴリに分類された(表2)。

(1) <凄みのある指導>

実習指導者の語気や態度が荒くなることを経験した

表2 実習における否定的体験《実習指導者の専門職としての資質》

重要カテゴリ	サブカテゴリ	重要アイテム	発言内容(要約)
実習指導者の専門職としての資質	凄みのある指導	気分や態度にムラ	・私にだけ態度が違う。 ・他の先生がいたりすると優しい。 ・態度が急変する。
		キレル指導者	・物にあたって威圧する。 ・明らかにイライラした態度で怖い。 ・OTとしての適性に疑問を持つほど態度が悪い。
		学生を馬鹿にした態度	・学生の不出来に対し嘲笑する態度をとる。 ・常に馬鹿にしたような態度で接してくる。 ・「そんなことも知らないの」とキツくなじられる。
		乱暴な態度	・常に怒ったような口調。 ・指示が命令口調で委縮する。 ・学生に対するイライラを大きな音を出すなどの行動で示す。
	実習学生が在籍する養成校に対する先入観	養成校自体や、その教育内容を批判	・他校養成校の学生の前で自身の養成校の非難を言う。 ・自身の養成校の卒業生や教員の悪口を聞かされる。
		大学の学生を優秀と決めつけている	・大学の学生は優秀と決めつけた発言や態度。
		専門学校を馬鹿にする	・専門学校の学生やOTを馬鹿にする発言。
	独自の実習指導	実習内容やカリキュラムを批判	・実習要綱内容を学生に批判。 ・最新の検査法などを講義で扱っていない養成校を批判。
		実習手順を守らない	・実習要綱を読まない指導者。 ・自身の実習指導のやり方に固執する。
		指導者が不在	・実習中に長期休暇をとる指導者。
		学生を放置する	・学生を指導者の監視下に置かない。 ・質問の機会がほとんどない。

表3 実習における否定的体験《実習学生の悩みを汲み取れない実習指導者》

重要 カテゴリー	サブ カテゴリー	重要アイテム	発言内容(要約)
実習学生の 悩みを汲み 取れない 実習指導者	指導の明確さ	指導が曖昧	・あいまいな指示。 ・質問に答えてもらえない。 ・同じ質問を繰り返し、その内容の説明をしない。
		不安だけをあおる	・「それでいいの？」などと言うのみ。 ・このままじゃダメと言うのみで、どうすればよいかわからない。
		手本を示さない	・事前準備をさせない。 ・正しい手本を示さない。
	適切な激励	他校の学生や先輩と比較する	・昨年の学生を例に出してほめ、「それに比較して、君のは」といった発言。 ・他校の学生や新入職員と知識を比べる。
		同級生と比較する	・他の時期に来た同級生と比較する。

という語りがある。その結果、/実習期間に委縮してしまっただけ/学習や実習継続の意欲が低下した/という意見があった。

(2) <実習学生が在籍する養成校への先入観>

実習指導者が過去の実習学生や教員等から得た養成校に対する否定的な感情やその養成校の教育内容を批判するような発言や、専門学校を大学と比較し見下すような実習指導者の発言や態度を見聞きし、実習学生は不快な体験をしている。

(3) <独自の実習指導>

レポート作成の有無やクラークシップ方式導入など、近年では実習スタイルが養成校によって異なることが多い中で、実習学生の養成校の臨床実習要綱に関する批判を言われたり、若しくは臨床実習要綱と異なるこれまでの自身の経験に基づいた独自の指導を受けた学生がいた。養成校のカリキュラムや実習方法の批判や非難を学生は否定的に捉えていた。

また実習学生を実習指導者の指示下に置かないことや、実習指導者が実習学生の実習期間中に連続して休暇を取ることも学生は否定的に捉えていた。

2) 《実習学生の悩みを汲み取れない実習指導者》

《実習学生の悩みを汲み取れない実習指導者》は、<指導の明確さ>、<適切な激励>の2項目のサブカテゴリーに分類された(表3)。

(1) <指導の明確さ>

「もう少し考えて」、「それでいいの?」などの曖昧な口頭指導や不安を煽るだけの指導を実習学生は否定的に感じている。それは実技に対しても同様である。実習学生は繰り返し考えさせられること、正答や明確な指示が与えられないことを不満に感じている。

(2) <適切な激励>

先輩、他校の学生、同級生など、対象がいずれであれ、知識や実技、レポート内容などを比較されることに強い不満を感じており、それらを否定的体験と捉えている。

3) 《実習施設の人間関係》

《実習施設の人間関係》は、<実習施設職員間の関係の悪さ>の1項目のサブカテゴリーに分類された(表4)。

<実習施設職員間の関係の悪さ>

実習施設職員間の関係の悪さを実習学生は否定的体験と捉えている。実習指導者との連携の悪さから、板挟みになったり、身動きが取れなくなったりする経験をしている。また職場内の人間関係の悪さに由来する職場の雰囲気の悪さを感じている。

IV. 考察

本研究は、学生の捉える臨床実習のインタビュー記録から、臨床実習が抱える課題を捉え、学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方を提示することであ

表4 実習における否定的体験《実習施設の人間関係》

重要 カテゴリー	サブ カテゴリー	重要アイテム	発言内容（要約）
実習施設の 人間関係	実習施設職員間の 関係の悪さ	スタッフ間の連携の悪さ	・指導者間の指導内容が食い違う。 ・学生への指導内容や指示内容がスタッフによって大きく異なり混乱した。
		実習地の雰囲気悪さ	・他のスタッフの悪口を学生に聞かせる。 ・実習指導者の指導を否定する他のスタッフ。

る。以下、FGIの分析結果から学生臨床実習のための方策について考察する。

1. 実習学生への丁寧な対応

学生らの実習における肯定的体験として、《実習学生への丁寧な対応》が挙げられた。具体的には、臨床実習時における学生の緊張を緩和させ、実習学生の良い点を引き出そうとするなどの実習指導者の実習学生への丁寧な関りや、明確で理解しやすい具体的な指導を、学生は肯定的に捉えている。

ゆとり教育以降、初等教育および中等教育における教員や様々な指導者の関わり方は、一人一人の児童生徒の個性の尊重を図ることによって、「児童生徒に自己存在感を与える」¹⁵⁾ことが重視されている。このような近年の学生の特徴として高木は「打たれ弱さ(失敗経験やそれへの感情に上手く対処できずに、実習や授業から逃げ出してしまう)」と「現実と乖離した自信(自信過剰と自信の無さという対照的な特徴があり、現実の能力を自己評価することができていないことから生ずると考えられる)」を挙げている¹⁶⁾。また坂野は「セルフ・エフィカシーと適応行動の遂行の間には密接な関係が認められる」¹⁷⁾と述べており、実習学生のセルフ・エフィカシーを高めることが、実習学生の適応行動の遂行を可能にさせると考えられる。さらに『作業療法臨床実習の手引き(2018)』は、「年代が離れるほど、学生との間にコミュニケーションのギャップが生じやすいことを自覚し、それを埋める努力をすること」¹⁸⁾を実習指導者に必要なものと述べている。

このような学生の特徴を踏まえて実習指導を行うこ

と、そして指導者が学生の不安を払拭させ、失敗させないように具体的にに関わり、自信をつけさせるといった、実習学生への丁寧な対応が重要であることが示唆された。

2. 専門職としての資質向上

学生の実習における否定的体験として、実習指導者の専門職としての資質不足に関するものが最も多く挙げられた。その中には、実習指導者の気分や態度にムラがあり、時に暴言や馬鹿にしたような態度をするなど、指導として不適切と思われるものまで含まれる。もちろんこれらはハラスメントの対象になるべきものではあるが、実習指導者との関係において、学生の立場では、意見を言うことが難しい状況にあると考える。松崎らの研究によれば、実習において不当待遇を体験したにも関わらず抗議した学生は6.7%にとどまると報告している¹⁹⁾。

各養成校の臨床実習要綱は実習の基本となる重要な事柄が記されているものであり、実習を行う上での基本となる大切な指針である。学生は臨床実習前にそれを熟読し、それに沿って実習を行うことを養成校は求めている。臨床実習において実習学生がこの要綱と異なる内容が求められたりする場合、実習学生は混乱し、その後の実習継続に懸念を抱いてしまう。特に実習指導者の不在や実習指導者の指導監視下に置かれていない状況では、実習学生は強く不安を感じる。『作業療法臨床実習指針(2018)』の中では「指導者の監視下で」という言葉が繰り返されており、実習学生を監視下に置くことは実習指導者の責務であろう。

さらに、今回の研究対象である専門学校の学生は、

「どうして大学に行かなかったの」などの臨床実習者の発言を受け、傷つけられている。これらの行為は実習指導者以前に、作業療法士という専門職としての資質に関わる言動といえよう。しかし学生たちは、実際にこのような状況を体験している。

古田は2011年に「入学する学生の質の低下（社会全体に質の低下）と教育の困難性」²⁰⁾について述べている。近年ではこれらについて様々な対策が行われている。職業倫理に関しては、養成課程における作業療法管理学や作業療法教育法等の科目や、卒業後のOT協会の基礎研修においても、後輩育成や職業倫理に関する教育が行われている。今後はその効果の検討とともに、卒前卒後の作業療法士の職業倫理教育の在り方についても検討が必要と考える。また理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の改正に伴い、臨床実習指導者には、臨床実習指導者講習会受講が義務付けられており、その内容には「臨床実習指導者の在り方（ハラスメントの防止について含む）」が含まれている。この講習の受講により、実習指導者の実習学生への関わり方が良い方向に向うことを期待したい。

3. 実習学生の悩みの理解

<指導の明確さ>、<激励の適切さ>は、実習における肯定的な体験で述べた「実習学生への丁寧な対応」の対照的な実習指導者の関わりといえる。

「もう少し考えて」、「もう一回考えて」の指導は、実習学生にとってどうしてよいかわからない。同様に実技場面においても「今のじゃダメ」では何がダメなのかわからない。実習学生は具体的な考え方や手本となる明確な指導を求めている。

臨床実習における実習指導者と実習学生のコミュニケーションの解決手法としてコーチング法が期待され²¹⁾、『作業療法臨床実習の手引き(2018)』においてもその効用が述べられている。一方、諏訪は「自信がない」など全く自己解決できない「依存」といわれるレベルの相手に対しては、「…しましょう」とうまく指示を出す「積極的なティーチング」²²⁾が必要と述べている。『作業療法臨床実習の手引き(2018)』にお

いても、コーチングとティーチングの使い分けについて述べられており、実習学生に応じて明確な指示を与えることが実習指導においては重要であるといえる。

また、他校の学生や別の時期に来た同じ養成校の同学年生と比較されることに苦痛を感じている。学生らも実習指導者からのそのような言葉が激励の一つであると理解はしていても、彼らの心に残るのはマイナスの感情のようである。高木は絶対評価導入により、「他児と比較して優劣をつけない風潮」とそれに伴う近年の学生の「失敗への耐性の低さ」を述べている²³⁾。実習指導者には、実習指導者の発言に対し、学生がどのような感情を抱くかなどを推測することが求められる。また、このような言葉かけをする実習指導者の意向は、「実習学生の考えや良さを引き出したい」といったものであっても、声掛けの工夫と配慮が必要と思われる。

4. 職場内の良好な人的環境

実習指導者と他職員との連携の無さや意見の違いは、実習学生を混乱させ、不必要な気遣いを実習学生にさせてしまう。実習学生は実習施設における職員間の関係や雰囲気気を遣うことにもなる。柴は「日常のお互いの作業療法内容について質問したり、議論を交わしたりする“風通しの良い職場雰囲気”は教育的土壌として重要である」²⁴⁾と述べている。また『作業療法臨床実習指針(2018)』においては、臨床実習指導体制として「チームによる指導の体制をとることが望ましい」と述べられている。これも「専門職としての資質」に関係するところでもあるが、実習学生が気遣いをせずに臨床実習が行えるよう、職場内の良好な人的連携も必要となろう。

以上のことから、学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方として、1) 実習学生への丁寧な対応、2) 専門職としての資質向上、3) 実習学生の悩みの理解、4) 職場内の良好な人的環境、の4つを学生の語りから抽出できた。

これらのことについては、2010年に作成された『作業療法臨床実習の手引き(第4版)』においても「サ

ポータティブな指導の必要性」や「実習生を理解するために」といった項目で、その重要性が指摘されている。しかし本研究における学生たちの語りからは、これらが未だ十分に活用されていないのではないかと推察する。

本研究の学生の語りを通して、学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方を考えると、学生にとって実習の満足度は臨床実習指導者に委ねられているところが多いことに改めて気づかされる。学生達の語りから得た4つの方策を理解することと、その実践の具体的な手順が述べられている『作業療法臨床実習の手引き(2018)』に沿って、実習を行うといった「実習指導者の臨床実習に対するモチベーション」が実習指導のカギになると考える(図2)。

今後、改定された『作業療法臨床実習指針(2018)』および『作業療法臨床実習の手引き(2018)』が運用され、実習指導者講習会による実習指導者教育が実施されても、実習指導者の臨床実習に対する高いモチベーションがなければ、実習学生の否定的体験は繰り返されてしまうだろう。実習指導者の臨床実習に対するモチベーションは、作業療法士の職業倫理などにおいて卒前卒後教育で繰り返し教育指導されているが、多忙な臨床業務の中でそのモチベーションの維持は難しいのかもしれない。臨床現場で働く作業療法士の環境は「診療報酬改定の影響により、余裕がある状況とはいいがたい」²⁵⁾といわれており、実習指導のモチベーションを個々の作業療法士の倫理観のみに委ねるのは難しくなっているとも思われる。竹田が「OTが業務の一環として実習指導を行うことが職場とOT双方に利点をもたらす方策を考えていく必要がある」²⁶⁾

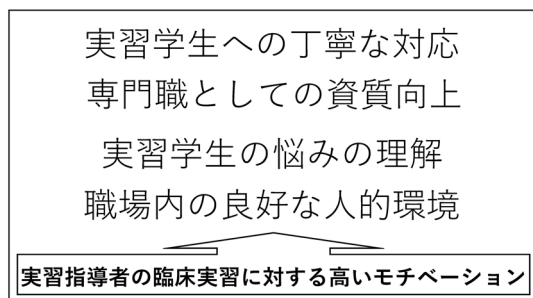


図2 学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方

と述べているように、今後は実習指導者の臨床実習に対するモチベーションを高める具体的な方策が必要ではないかと考える。

本研究により提言された4つの方策と、臨床実習に対する実習指導者のモチベーションを高めることにより、臨床実習がより良いものになることを期待したい。

5. 本研究の限界と課題

本調査は当該専門学校の学生のみを対象に行っており、その主観に基づくものに限られる。また作業療法士養成校は、専門学校においても修業年限や昼・夜間部など様々な設置形態があり、さらに短期大学、4年制大学があることから、学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方を検討するには、様々な養成校からの情報を得て整理する必要がある。

「学生の満足度の高い臨床実習」にしていくためには、実習指導者と学生の双方の内省の分析が必要であり今後の課題としたい。

V. 結論

学生の語りから、学生の満足度の高い臨床実習の実践の在り方として、1) 実習学生への丁寧な対応、2) 専門職としての資質向上、3) 実習学生の悩みの理解、4) 職場内の良好な人的環境、の4つと、その実践のためには「実習指導者の臨床実習に対する高いモチベーション」が必要であると提言する。今後は、今回提言した内容の具体的実践とその検証を行い、作業療法士養成教育に貢献していきたい。

謝辞

本研究にご協力いただいた対象者の方々、分析考察に際しご助言、ご指導いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

なお、本研究において報告すべき利益相反はない。

文献

- 1) 阿部知子. 2016. 理学療法士・作業療法士の臨床実習に

- 関する質問主意書。第190回国会質問の一覧。 http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/a190180.htm 2019.07.20
- 2) 日本作業療法士協会養成教育委員会編。作業療法臨床実習指針(2018)。東京:日本作業療法士協会, 2018: 3
 - 3) 武田徳則。作業療法士養成のための臨床実習再考。作業療法ジャーナル 2011; 45(4): 316-319
 - 4) 神保洋平。臨床実習のあり方 クリニカルクラークシップ導入前後から見えてきたもの。神奈川作業療法研究 2013; 3(1): 9-12
 - 5) 佐藤義久。本学の臨床実習の考え方と取り組み。作業療法ジャーナル 2016; 50(13): 1363-1367
 - 6) 工藤亮。臨床実習再考。作業療法ジャーナル 2011; 45(4): 332-337
 - 7) 柴貴志。臨床実習の質の向上に向けた研修制度と提言。作業療法ジャーナル 2013; 47(4): 323-329
 - 8) 坂本安令。臨床実習における現場の作業療法士の実践診療参加型臨床実習(クリニカル・クラークシップ)の勧め。神奈川作業療法研究 2013; 3(1): 1-7
 - 9) 佐々木千寿, 里村恵子。作業療法士養成専門校学生へのアンケート調査による臨床実習満足度尺度作成に関する研究。作業療法教育研究 2011; 11: 45-53
 - 10) 善明雄太, 森田正治, 池田拓郎ら。臨床実習における学生の興味・非興味分野と満足度・SOCの関係性。日本リハビリテーション教育学会誌 2018; 1(1): 32-36
 - 11) 安梅勅江編著。ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法Ⅲ。東京:医歯薬出版, 2010: 4-5
 - 12) Vaughn S, Schumm JS, Sinagub JM (井下理監訳)。グループ・インタビューの技法。東京:慶應義塾大学出版, 1999: 100-111
 - 13) 安梅勅江編著。ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法Ⅱ。東京:医歯薬出版, 2003: 10-15
 - 14) Vaughn S, Schumm JS, Sinagub JM (井下理監訳)。グループ・インタビューの技法。東京:慶應義塾大学出版, 1999: 134-145
 - 15) 文部科学省。生徒指導提要。東京:教育図書, 2010: 5
 - 16) 高木邦子。現代の学生気質とその対応。作業療法ジャーナル 2011; 45(4): 320-321
 - 17) 坂野雄二。セルフ・エフィカシーの臨床心理学。東京:北大路書房, 2002: 10
 - 18) 日本作業療法士協会養成教育委員会編。作業療法臨床実習の手引き(2018)。東京:日本作業療法士協会, 2018: 26
 - 19) 松崎秀隆, 原口健三, 吉村美香ら。臨床・臨地実習で医療系学生が感じる不当待遇。理学療法科学 2015; 30(1): 57-61
 - 20) 古田常人。作業療法教育の再考—文献による内容分析から。文京学院大学保健医療技術学部紀要 2011; 4: 43
 - 21) 柴貴志。臨床実習の質の向上に向けた研修制度と提言。作業療法ジャーナル 2013; 47(4): 323-329
 - 22) 諏訪茂樹。対人援助のためのコーチング。東京:中央法規出版, 2007: 7
 - 23) 高木邦子。現代の学生気質とその対応。作業療法ジャーナル 2011; 45(4): 320-325
 - 24) 柴貴志。臨床実習の質の向上に向けた研修制度と提言。作業療法ジャーナル 2013; 47(4): 323-329
 - 25) 工藤亮。臨床実習再考。作業療法ジャーナル 2011; 45(4): 332-337
 - 26) 竹田徳則。作業療法士養成のための臨床実習再考。作業療法ジャーナル 2011; 45(4): 316-319

Development of an ideal method for ensuring a highly satisfying clinical training experience among students based on interviews with postgraduates

Yoshinori NOMOTO, Motoko SUGIHARA, Takamichi TANIGUCHI and Daisuke HIRANO

Abstract

Objectives: The objective of this study was to find an ideal method for ensuring a highly satisfying clinical training experience among students of occupational therapist training schools based on the interviews of graduates of occupational therapy about their clinical training experience.

Methods: The methodology included qualitative research through focus group interviews. I created an interview guide with the theme “what was good and bad about clinical training and how to improve it”. I interviewed 17 graduates of occupational therapy at vocational schools in two groups. For qualitative-analysis methodology, I referred to Anbai’s analysis method for group interviews and the analysis method of S. Vaughn et al. For further analysis, I used “NVivo 12 Pro Japanese version for Windows,” a software that supports qualitative research.

Results: From the interviews, I determined four ways in which clinical training can be highly satisfying for students: polite correspondence among students during practical training; professional improvement in the qualifications of the instructors; an understanding of the students’ worries among the instructors; and good human interactions in the workplace.

Discussion: For these points to be applicable, it is important that the instructors are highly motivated for clinical training.

Keywords : clinical training, occupational therapy students, practical training instructors, focus group interview